

『震え、触れ、琴線』 紳士風情

震  
え  
、  
触  
れ  
、  
琴  
線

紳  
士  
風  
情

『震え、触れ、琴線』 紳士風情

登場人物表

富谷 奏 (17)	(12)	高校二年生。
志満 歌音 (17)		高校二年生。
志満 律歌 (20)		大学二年生。
志満 香織 (48)		歌音と律歌の母。
河原 木 (38)		オルゴール職人の弟子。
富谷 京子 (44)		奏の母。
芽森 真紀 (35)		奏のピアノの先生。
アシル (3)		アメリカン・ショートヘア。
モーリス (5)		ゴールドデンレトリバー。
学生 1	子ども 1	
学生 2	子ども 2	
先生 1	母親	
先生 2	女性 1	
審査員 1	女性 2	
	女性 3	

○八幡坂（昼）

函館湾に向かって八幡坂を下りる車。

○八幡坂前学校・帰路（昼）

テストが終わり、早めに帰る学生たち。

学生1 「やっとテスト終わったー！」

学生2 「夏休みじゃん。ヤバくない？」

学生たち、八幡坂を下りず、真っすぐソフトクリーム屋へと向かう。

○八幡坂（昼）

学生たちとすれ違う富谷奏（17）。

気にせず、八幡坂を下る奏。

○ピアノ教室（昼）

奏、練習曲を弾く。

横で譜面を捲る茅森真紀（35）。

弾き終える奏。

真紀 「うん、前より良くなってる。たくさん練習したみたいね」

譜面を見る奏。

奏「先生、ここをもう少し滑らかに弾けるようになりたいんですが」

真紀「え、どこ？」

真紀、譜面に顔を近づける。

真紀「あー、ここはね」

奏に弾きながら教える真紀。

○ピアノノ教室前（夕）

奏「ありがとうございます」

真紀「はい。気をつけて帰ってね」

頭を下げる奏。

○末広町駅（夕）

本を読みながら奏、函館市電を待つ。

函館市電、止まる。

奏、本を閉じ乗り込む。

○函館市電（夕）

椅子に座って再び本を読む奏。

揺れる函館市電。

○堀川町駅（夕）

降りる奏。

○帰路（夕）

姿勢を正して歩く奏、バイクとすれ違う。

○富谷家・玄関（夕）

靴から鍵を取り出し開ける奏。

奏「ただいま」

奏、扉を閉じる。

○富谷家・リビング（夕）

棚に並べられた幼少期の奏の写真。

写真の中の奏、楽しそうにピアノを弾く

様子や、演奏会で笑っている姿。

グラランドピアノを横目に見る奏。

キッチンから声をかける富谷京子（4

4）。

京子「あらおかえり。もう少しで夕飯できるから。手洗って待ってて」

奏「……うん」

リビングを後にする奏。

○ 富谷家・葵の部屋（夜）

夕食後、部屋に入るなり電子ピアノに近づき、イヤホンをセットし弾き始める奏。

○ 堀川町駅（朝）

制服で函館市電を待つ奏。

函館市電、駅に到着する。

奏、乗り込む。

○ 函館市電（朝）

数名の観光客とすれ違う奏。

奏、つり革を掴んで外を見る。

○ 函館駅前駅（朝）

何とか乗り込もうと観光客、押し寄せる。

身体を寄せたり、奥へ進んだりする奏。

○函館市電（朝）

十字街駅から末広町駅の間にある八幡坂や景色に声を上げる観光客。  
奏、ポーっと外を見る。

○末広町駅（朝）

奏、たくさん降りる人の流れに逆らわずに降りる。

○八幡坂（朝）

坂を上る奏。

自転車で駆け上がる志満歌音（17）。

歌音「よいしょ…よいしょと！」

奏、気にせず歩き続ける。

○職員室（朝）

先生1「あ、音楽室だっけ」

奏「はい。鈴木先生から既に許可は得ていま

す」

先生1 「うん、聞いてるよ。はい、これ鍵」

扉の近くの鍵管理箱から音楽室の鍵を

取り出し、奏に渡す先生1。

奏 「ありがとうございます」

奏、丁寧にお辞儀をしてからいなくなる。

○音楽室（朝）

奏、入るなりもあつと暑さが襲い掛かり、  
すぐさまエアコンをつける。

ピアノを見つめてから鞆を置き、楽譜を  
取り出し、譜面台に置いて座る奏。

弾き始める奏。

× × ×

ピアノのコンクールに出る富谷奏（1  
2）。

かつて教わっていたピアノの先生と審  
査員1、肩を並べて座る。

審査員1 「あの子には才能があるんだけど何  
かが足りないんだよなあ……」

弾き終え、頭を下げる奏。

× × ×

ピアノを弾く富谷奏（17）の横顔。

× × ×

表彰状を受け取る参加者を見る富谷奏（12）。

× × ×

富谷奏（17）、ゆっくりと弾き終える。

歌音、扉をガラツといきなり開ける。

驚く奏、立ち上がる。

箱を持った歌音、笑顔を浮かべて近づいてくる。

歌音「すごーい！今の貴方が弾いていたの！？」

固まったままの奏。

歌音「有名な曲だね？名前は忘れちゃっ

たけど、よく聞くよ！」

奏「……あの、どちら様でしょうか」

荷物を置いて一呼吸する歌音。

歌音「二年C組の志満歌音です！よろしく

お願いします！」

奏 「え、同い年……？」

歌音 「え、先輩じゃないの！？」

奏、頭を下げる。

奏 「……二年A組の富谷奏です」

歌音 「奏ちゃん！ A組なら佐々木つちとか

よつちーと一緒だね！」

奏 「……誰？」

歌音 「あれ？ 違ったっけ」

奏 「……多分、そう」

歌音 「だよねー！ よかった！ ねえねえ、

もう一回弾いてくれない？」

目を輝かせる歌音。

目を丸くする奏。

奏 「……いいけど」

歌音 「やったー！ ありがとう！」

歌音、音楽室にある机と一体型の椅子を

近くに持ってくる。

再び弾き始める奏。

○音楽室（昼）

弾き終わると拍手する歌音。

歌音「すごいね！ めっちゃ綺麗な音だった

よ！ 鍵盤が踊ってるみたいで……」

奏「そういうの、大丈夫です」

歌音「……そっかー」

音楽室の扉をノックして開ける先生2。

先生2「志満！ お前どこまで荷物持って行

ったのかと思ったら！」

歌音「あ、そうだった！ ごめんなさーい！」

歌音、立ち上がって、荷物を持ち上げる。

歌音「もしよかったらまた聞かせてね！ 志

満歌音だよ！ よろしく！ じゃあね！」

笑顔で先生2の元へ駆け寄る歌音。

音楽室の扉が閉まるのを見届けてから

しばらく扉を見る奏。

○職員室（夕）

奏「ありがとうございますでした」

奏、扉を静かに閉め、職員室を去る。

○八幡坂（夕）

下る奏。

自転車に乗って駆け下りる歌音。

歌音「奏ちゃーん！」

歌音に合わせて歩く速度を遅くする奏。

歌音「さつきはありがとう！」

奏「大丈夫」

歌音「ピアノ好きなんだねー！」

奏、顔を曇らせる。

奏「（小声で）やらなくていいならやってない」

歌音「え？」

歌音、耳を傾ける。

奏「あの曲、好きなの？」

歌音「うーん……好きではないかな！」

奏「えっ」

歌音「好きなのかなー？　って思ったけどよ

く聞くだけで好きではないかな！」

奏、若干引き気味で歌音を見る。

歌音「でも、音は好き！」

奏「……意味が分からないんだけど」

歌音「難しいな」

大袈裟に頭を傾げる歌音。

歌音「あ！　じゃあうち来て！」

奏「……は？」

目を合わせる歌音と奏。

○オルゴール専門店前（夕）

奏、看板を見る。

奏「ここがお家なの？」

歌音「あれ？　言ってなかったっけ？」

奏「初耳」

歌音「なら改めまして！　志満か……」

奏「それはもういい」

歌音「そう？　じゃあ、じゃじゃーん！　私

のおじいちゃんが」

奏、無視してお店に入る。

歌音「ちよっと待って、ちよっと待って」

○オルゴール専門店（夕）

観光客で溢れる店内。

いたるところから流れるオルゴール。

ゆっくりお店の奥へ入っていく奏。

歌音「さっきの曲、これだよね」

歌音、透明な箱に入ったオルゴールのネジを回しながら歩み寄る。

奏、箱を受け取り、耳を傾ける。

オルゴールのネジが止まると同時に話しかける歌音。

歌音「いいよねー！」

奏「でも好きじゃないんでしょ」

歌音「うん。オルゴールとか楽器で聴くのは好きなんだけど」

奏、箱を歌音に返す。

陳列を終えた志満律歌（20）、歌音と奏に近づく。

律歌「なに、お友達？」

歌音「お姉ちゃん！」

奏「はじめまして、富谷奏と申します。志満さんとは今日知り合いました」

律歌 「え、今日？」

歌音 「そう！ 奏ちゃん、ピアノが上手なん  
だよ！」

律歌 「へー！」

律歌、奏の顔を見ながら微笑む。

律歌 「てか、あんたも紹介終わったら手伝っ  
てよー」

歌音 「わかった！」

観光客に声をかけられ律歌、持ち場に戻  
る。

歌音 「私のお姉ちゃん！ 大学は札幌の方な  
んだけど、夏休みの間戻ってきて推し？  
のためにバイトしてるんだって！」

奏 「そこまで聞いてないけど」

奥で歌音の名前を呼ぶ志満香織（48）。

奏 「お母さん？」

歌音 「うん。呼んでるみたいだからちよっと  
行ってくる！」

奏 「私もそろそろ帰る」

歌音 「あ、そっか。明日も学校行くの？」

奏、少し考えてから

奏「多分」

歌音「また聞きに行ってもいい！？」

奏「別にいいけど」

歌音「じゃあ聞きに行く！」

香織「歌音ー！」

歌音「はい！　じゃ、明日ね！」

手を振る歌音。

近くにあったオルゴールをチラッと見るもそのまま帰る奏。

○音楽室（昼）

ピアノを弾く奏。

目を瞑りながら聞く歌音。

奏、弾き終える。

拍手をする歌音。

歌音「小さい頃からやってるの？」

奏「お母さんにやれて言われて」

歌音「お母さんもピアノ弾いてるの？」

奏「ううん。何か一つでも得意なことを身に

付けておきなさいって」

歌音「そーなんだ！ 得意なことかー！」

奏「志満さんは習い事やってないの？」

歌音「今は絵画教室行ってるよ」

奏「絵を描くのが得意なの？」

歌音「得意？ 得意なのかな？」

歌音、首を傾げる。

歌音「空手とかそろばんとか習字とかいろいろやってたけど、どれも飽きちゃってさー。

でも絵描くのって何でもアリだから続けているのかも」

歌音を見る奏。

歌音「まだ初めて一週間も経ってないけど

ね！」

奏「えっ」

歌音「だからまだわかんないけど、今までやってきた中では一番楽しい！」

目が合う奏と歌音。

奏、すぐさま目を逸らす。

奏「ご両親が何も言わないならいいけど」

歌音「いやさすがに続かなさすぎてお姉ちゃんにも言われるよ」

奏、眉をひそめる。

歌音「そうだ！ これ！」

歌音、鞆の中から箱を取り出す。

奏「これって」

歌音「お母さんから。売り物じゃなくって申し訳ないけど、もしよければって！」

箱を受け取る奏。

箱のラベルにはオルゴール店で聴いた

曲の名前。

奏「いいいの？」

歌音「話してる最中に割り込んだんじゃったから何かお詫びがしたかったんだって」

奏「別にいいのに」

歌音「いいよ！ 来てくれたお礼も兼ねて！」

奏「……ありがとう」

透明な箱を見る奏。

笑顔を浮かべる歌音。

○ 富谷家・奏の部屋（夕）

イヤホンをしながらピアノを弾く奏。

鞆の中、オルゴール入ったまま。

アシル（3）、奏の鞆の中を漁る。

奏、気づいて手を止める。

奏「やめて」

アシルを持ち上げる奏。

鞆からオルゴール、落ちる。

奏、拾い上げる。

見つめた後、棚にしまう奏。

奏、イヤホンをつけ、弾き直す。

○ 末広町駅（昼）

ピアノ教室帰り、函館市電を待つ奏。

函館市電、止まる。

乗る奏。

○ 函館市電（昼）

つり革に掴まる奏。

歌音「すいませーん！ 乗りまーす！」

外から走ってくる歌音。

奏、乗り込む歌音と目が合う。

歌音「あ！ 奏ちゃんだ！」

近づく歌音。

発車する函館市電。

歌音「学校帰り？ でも私服？」

奏「今日はピアノ教室」

歌音「この辺なの？」

奏「うん。最寄りには学校と同じ」

歌音「便利でいいね！」

八幡坂の前を通る函館市電。

窓を見る歌音。

奏「自転車は？」

歌音「自転車さー、タイヤがパンクしちゃっ

て。せつかくだし、久しぶりに市電使おう

と書いて」

相槌を打つ奏。

歌音「あ、ここだ。奏ちゃんはどこまで乗る

の？」

奏「堀川町」

歌音「もうちよつと先かー！」

十字街駅に着く函館市電。

歌音「じゃあね！ 気をつけて帰ってね！」

手を振る歌音。

奏、窓の外を見る。

歌音、降りようとした瞬間、声を出す。

歌音「すいません！ 降りるところ間違えました！」

閉まる扉。

奏に近づく歌音。

歌音「ねえねえ、もしよければ家でバイトしない？」

奏「きゅ、急だね」

歌音「お父さんがぎっくり腰になっちゃって、

突然だけど人が必要なんだよねー」

考える奏。

奏、手を前に拝む。

歌音「お願い！」

奏「……ピアノの練習優先でよければ」

歌音「いいよ、全然いいよ！ ありがとう！」

魚市場通駅に止まる函館市電。

歌音「明日の午前中は？」

奏「明日は……大丈夫」

歌音「じゃあ九時に家に来て！」

手を振りながら降りる歌音。

奏、歌音を目で追う。

発車する函館市電。

○オルゴール専門店（朝）

エプロンを着て、香織や律歌の前で頭を

下げる奏。

奏「よろしくお願いします」

香織「突然でごめんなさいね」

奏「いえ」

後ろからドタバタとやってくる歌音。

歌音「お待たせー！」

律歌「あんたの方が近いのになんで遅れるわ

け

歌音「モーリスが離してくれなくて」

奏「モーリス？」

香織 「家の犬の名前よ」

香織、スマホを取り出し、写真を奏に見せる。

歌音と律歌に挟まれるモーリス（5）の  
写真。

奏 「可愛いですね」

歌音 「なにになにー？」

律歌 「いいからあんたは早く富谷さんに教えてあげなさい」

近づこうとする歌音の頭を掴む律歌。

苦笑する香織。

○オルゴール作り体験コーナー（朝）

並べられたオルゴール。

掃除をする律歌。

レジを確認する香織。

歌音 「夏休み中は体験コーナーが少し豪華になるんだ」

奏 「豪華？」

歌音 「いつもはパーツの種類が少ないんだけ

ど  
」

机の上に箱を置く歌音。

歌音「星とか海とか、夏っぽいのが増える！」

パーツを手に取り紹介する歌音。

奏、音符の形をしたパーツを手に取る。

歌音「さすがお目が高い！」

奏「人気なの？」

歌音「人気、人気！ オルゴールだからかな？」

箱を漁る歌音。

歌音「私のおすすめはね……」

スイカやメロンのパーツを取り出す歌

音。

歌音「こういう果物とか可愛くない？」

奏「オルゴールにはつけないでしょ」

歌音「やっぱりー？ いつも残るんだよねー」

歌音、奏にパーツごとに分かれた小物入

れを渡し、一緒に並べる。

奏、黙々と丁寧に置いていく。

歌音「これが終わったら次は」

オルゴール体験の手順を説明する歌音。

○オルゴール専門店（昼）

いつもより人が多くなる店内。

奏、オルゴール体験会の手続き場で待機

しながら店の様子を見る。

歌音、観光客におすすめを伝える。

律歌、レジで会計をする。

香織、奥で在庫を確認する。

○オルゴール作り体験コーナー（昼）

奏に声をかける河原木（38）。

河原木「あの、今体験できますか」

奏、ハツとして立ち上がる。

奏「はい。すぐご案内できます」

河原木「一人なんだけど、大丈夫そう？」

奏「お一人様でも大歓迎でございます。こち

らへお名前とご住所、作りたい曲の番号を

ご記入ください」

奏、ペンと紙を渡し、曲一覧の表を見せる。

河原木、ペンを受け取り、書きながら聞く。

河原木「曲は後でもいい？」

奏「あ、はい。大丈夫です」

河原木、書き終えペンを渡し、奏に奥へ案内される。

奏「ではご説明させていただきます」

河原木「うん、よろしくお願いします」

一つ一つを丁寧に説明していく奏。

河原木、相槌を打ちながら話を聞く。

律歌、奏と河原木の方を見る。

奏「では、終わりましたらお気軽にお声をかけください」

河原木「はい」

奏、頭を下げて持ち場に戻ると歌音が母親と子ども二人を連れてくる。

歌音「奏ちゃん！オルゴール体験をご希望です！」

奏「はい。では、こちらに」

律歌、レジに来た観光客に頭を下げ、対

応ずる。

子どもと楽しそうに話す歌音。

子ども1「あたし、トトロがいいー！」

子ども2「ねえねばつかズルい！」

子ども1「じゃあ一緒に……」

母親「同じやつじゃ勿体ないでしょ。こっちの方がいいんじゃないの？」

表を見ながら顔を曇らせる子ども2。

歌音「あの、同じ曲でもいいと思いますよ！」

母親「え？」

歌音「気に入らなかつたら、作り終えるまで

は変更できるので！」

母親、子ども2を見てから

母親「じゃあとりあえず、これ二つで」

奏「かしこまりました。お席へご案内いたします」

河原木が座っている席から通路挟んで

反対側に座る母親と子ども1、子ども2。

歌音「あ！　かわら」

歌音の声にシーっと人差し指を口に当

てる河原木。

わざとらしく無視をする歌音。

言いたい放題言う子どもたちにもたちに固まる

奏とバトンタッチする歌音。

歌音「説明は私がするね！」

奏「あ、ありがとう」

歌音、子ども1、子ども2に分かりやすく説明する。

奏、河原木の様子を近づくふりをして、さり気なく見る。

真剣に箱を装飾していくも不器用さが

垣間見える河原木。

河原木、奏と目が合い、微笑む。

河原木「『どうしてそんなこともできないんだろう』って思ったでしょ」

奏「い、いえ」

河原木「君、何でもできそうだから」

河原木、花をつける作業に戻る。

奏、少しむっとしながら

奏「どうしてそう思ったんですか」

河原木「んー、そつなくこなしてる感じとか？」

河原木、パーツを落とす。

奏、パーツを拾う。

奏「新しいものとお取替えしますか」

河原木「それ！　そういうところ！」

奏「……は？」

河原木、奏から丁寧に拾ったパーツをも  
らう。

河原木「求められることを決めるまでのス  
ンが早いよね、君」

奏、訝しげに河原木を見る。

律歌「歌音——！　在庫の箱どこに置いたー？」

歌音「レジの横——！」

歌音と会話しながら作る子ども1、子ど  
も2。

奏、歌音を見る。

河原木「どうしてこんなおじさんがオルゴ  
ー  
ル作ってるか、気にならない？」

奏「え、ええ、まあ……」

河原木「今度、娘の誕生日なんだ」

奏「それは、おめでとうございます」

河原木「ありがとう」

にこつと笑う河原木。

奏「でしたら、曲はお誕生日の……」

律歌「歌音——！ レジ横にないんだけどー！」

律歌の声に驚き、振り向く奏。

訪れた律音に場所を言い直す歌音。

河原木「あ、引き留めちゃってごめんね。ま

た出来たら呼ぶよ」

奏「……はい」

奏、手続き場に戻る。

座りながらもピアノを指で弾く奏。

奏、いたるところから流れるオルゴール

へ徐々に耳を傾け、弾く曲も変わってい

く。

歌音「じゃあ曲、えらぼつか！」

後ろから聞こえた歌音の声に意識を現

実に戻し、曲一覧の表を持って立ち上が

る奏。

歌音「奏ちゃ」

奏「はい、これ」

歌音「よくわかったね！？　ありがとう！」

歌音、奏から表をもらって子どもたちの  
ところへ戻る。

歌音を見届ける奏、手を上げる河原木と  
目が合う。

奏「はい、今行きます」

奏、河原木の元へ近づく。

河原木「途中、あっちのお姉さんにアドバイ  
スもらったりしたんだけど、なかなか上手  
くないかね」

苦笑する河原木。

奏、指でパーツを指しながら

奏「でしたら、ここは……」

河原木「ううん。このままでいいかな」

奏「……娘さんへの贈り物ですよ」

河原木「うん」

奏「お言葉ですが、もう少し丁寧に……」

河原木「それなら既製品を買おうよ」

奏、眉をひそめる。

河原木「ごめん、さっきのは俺の言い方が悪かった。うまくいかなかったてもこういうのは楽しいよね」

奏、見えないように手を力強く握る。

河原木「曲、選んでもいい？」

奏「……どうぞ、こちらへ」

歌音、楽しそうに子どもたちと触れ合う。

○オルゴール専門店（昼）

曲を視聴する河原木。

河原木「君のおすすめある？」

奏「私のおすすめですか？」

奏、歌音からもらったオルゴールと同じ  
ものを選ぶ。

奏「これです」

河原木「へー！ これかあ」

耳を傾ける河原木。

河原木「いい曲選ぶね」

奏「ありがとうございます」

河原木、オルゴールを手を持つ。

河原木「で、他は？」

奏「……ありません」

河原木「断言しちゃったよ」

奏「お客様がお好きな曲でよろしいかと」

河原木「うーん、それもそうなんだけど」

河原木、頭を搔く。

律歌「河原木さん、その子はピンチヒッター  
です。あまり遊ばないでください」

近づく律歌。

河原木「遊んでないよ、遊んでない。この子、

素直で、真面目で、いい子だ」

奏「お姉さんのお知り合いですか」

律歌を見る奏。

律歌「河原木さんはオルゴール職人。祖父の

弟子にあたる人」

河原木「今日はオフだから。ふらふらしてた

んだけど、結局ここに来ちゃったよね」

律歌「それで新顔を見つけていじめですか。

サイテーですね」

河原木「言い方！」

呆気に取られる奏。

河原木「細かいことが気になるのが、俺の癖  
でね」

律歌「刑事でもなくせに」

奏「お客様でもないんですね」

律歌、奏の顔を見る。

律歌「そういうこと」

奏「では、失礼します」

奏、踵を返す。

河原木「待って。体験会の客なのは本当だよ！」

歩く足を止める奏。

振り返って、あからさまに嫌そうな顔を  
する奏。

律歌「一体、何をしたんですか」

河原木「そこまで嫌われるようなことをした

覚えはないんだけどなあ……」

律歌「そういうところですよ」

河原木「えっ、どういうこと！？ 律歌さ

ん！？」

律歌「（小声で）わかってるだろ」

律歌、レジへ戻る。

奏「早急に選びましょう」

河原木「う、うん？」

奏に案内され、曲を選び直す河原木。

○オルゴール専門店（夕）

歌音、奏にお礼を言いつつ、明日もよろしくと香織、律歌とともに頭を下げる。  
ピアノ教室に向かって歩き出す奏。

○ピアノ教室（夕）

ミス一つなしで弾き終える奏。

真紀「うん、完璧ね」

譜面を見つめる奏。

真紀「他に気になるところある？」

花の装飾がされた置物を見てから鍵盤を見る奏。

奏「……私は、早いんでしょうか」

真紀「ん？」

頭を悩ます真紀。

真紀「いやテンポはちょうどいいし、何なら機械と同じくらい正確だと思うけど」

真紀、メトロノームを側に持ってくる。

黙る奏を見つめる真紀。

真紀「……よし、じゃあ他にやってみよう」

奏、鍵盤から真紀へと視線を動かす。

真紀「来週までに弾きたい曲探してきて」

奏「弾きたい曲なんてありません」

真紀「本当に？ 前に弾いた曲でもいいよ」

奏、少し考えてから

奏「わかりました」

頷く奏。

○オルゴール専門店（朝）

オルゴールの位置を調節する奏。

河原木「すごいね。ズレ一つないじゃない」

静かに近づいてきた河原木に驚く奏。

奏「……また騙しに来たんですか」

河原木「違うって！ 今日出勤日！」

ポスターを指で指す河原木。

『アンテイクオルゴール 実演会』と  
書かれたポスター。

河原木「週に二回と一日に二回。あそこにあ  
るオルゴールを動かすのが俺の仕事」

数字の二を手で作りながら言う河原木。  
アンテイクオルゴールに目をやる奏。

河原木「興味ある？」

奏「いえ、まったく」

河原木「あら、そら残念」

大袈裟に残念がる河原木。

歌音「あ！ 奏ちゃん！ と、河原木さん！」

河原木「よっ、歌音さん」

歌音と河原木、テンション高めにハイタ  
ッチをする。

歌音「今日もやるんだよね！」

河原木「うん、もちろん」

歌音「何の曲やるの？」

河原木「そうだな……」

河原木、奏を見る。

河原木「富谷さんが好きな曲なんてどう？」

歌音「あれやるの!?」

奏「……私は関係ありませんよね」

河原木「ちようどいい機会だしね!」

河原木、準備をしに行く。

置いて行かれる奏。

歌音「よかったね! 奏ちゃん!」

めんどくさそうに河原木の後ろ姿を見る奏。

○店内広場（昼）

アンティークオルゴールの後ろに立ち、集まった客の前で歴史を説明する河原木。

奏、観光客の相手をし終わると、視線をアンティークオルゴールへ向ける。

河原木「では実際に音を聞いてみましょう」

ハンドルをゆっくり回し始める河原木。

店内に響き渡る奏選曲の音楽。

香織「今日は調子いいわね、河原木さん」

奏の隣に立つ香織。

香織 「いつもちよつとだけ速くなったり遅くなったりするみたい」

奏 「回すだけじゃないんですか？」

香織 「それが意外と難しいのよ」

河原木、回し終えるとハンドルを観光客に任せ、回してもらおう。

観光客のスピード、速くなったり遅くなったりでやや不協和音。

拍手をする河原木、観光客たち。

香織、観光客に声をかけられ、いなくなる。

河原木 「ありがとうございました。では続いて二曲目をご紹介します」

河原木、円盤オルゴールの説明をすると、二曲目を回し始める。

奏、持ち場に戻ろうとすると聞き覚えのある曲に耳を傾けてしまう。

アンティークオルゴールを見つめる奏。

○オルゴール専門店（昼）

アンテイクオルゴールを片付け終えた河原木、奏と歌音と律歌と話をする。

歌音「今日、すっごい良かったー！」

河原木「ありがと、歌音さん」

律歌「最近、二曲目の曲ばっかやるけど、お気に入り？」

河原木「うん。あれ映画の曲なの知ってる？」

律歌「だから聞いたことがあったのね」

歌音「えっ、CMの曲じゃないの？」

河原木「そうか、若い子だとそっちの印象が

強いかな」

レジの奥で在庫整理する香織。

香織「歌音、律歌ー、ちよつと来てこれ運ぶの手伝ってくれない？」

歌音「はーい！」

律歌「今行く」

河原木と二人で残される奏。

河原木、オルゴールの調整をしに行こうとする。

奏「あの」

足を止める河原木。

河原木「ん？　どうかした？」

奏「この間の、どういう意味ですか」

河原木「この間の？」

考える河原木。

奏「『求められることを決めるまでのスパンが

早い』という言葉です」

河原木「……俺、そんなこと言ってたっけ」

奏、黙った後、頭を下げる。

奏「すみませんでした」

河原木「え、あ、多分言った！　言ったね！

覚えてるよ！」

奏「いいです、ご無理をなさらないでくださ

い」

河原木「何を見ているか！」

奏、振り返って河原木を見る。

河原木「め、目の前のことだけで判断してる  
でしょ。これはあくまで俺の推測だけど」

無駄にかっこつける河原木。

奏「目の前のこと以外にどこで判断すればい

いんですか」

河原木、真面目な返答に驚きつつ、真剣な表情に戻って

河原木「……それは」

河原木、視線を歌音に動かす。

奏、歌音を見る。

歌音「贈り物ですか？ ご自宅用ですか？ あ、自分へのご褒美って感じですか！ いいですねー！ ぜひ私もご協力させてください！」

観光客と話す歌音。

河原木「歌音さん、魔女宅かハウルか。あるいはドビュッシーとか、その辺りを選ぶよ」

歌音、『魔女の宅急便』の曲を選ぶ。

奏、目を丸くし、河原木の方を見る。

奏「どうして……」

河原木「見ればわかるよ」

真剣に歌音を見る河原木。

苛立ちを隠せない奏。

奏「それがわからないから……！」

審査員1 「あの子には才能があるんだけど何

かが足りないんだよなあ……」

× × ×

奏、言葉を押し殺して拳に力を込める。

河原木 「富谷さん？」

奏 「あんなの努力でどうにもならない。生まれ持った才能に勝てるわけが……！」

河原木 「だから楽しむしかないんだよ」

歌音、河原木に気づいて手を振る。

河原木、笑って手を振る。

俯く奏に視線を戻す河原木。

河原木 「俺は……いや、俺も歌音さんも、君の好きな曲を聞くの、待ってるよ」

河原木、奏とすれ違って客の対応をする。

○末広町駅（夕）

駅で函館市電を待つ奏と歌音。

歌音 「遅くなつてごめん！」

奏 「お母さんには連絡してあるから大丈夫」

少し元気なさげに答える奏。

心配そうに見つめる歌音。

歌音「何があつたのか、聞いてもいい？」

静かな奏。

歌音「あ、じゃあ最近あつたことで……」

奏「私、ピアノが嫌いな」

口を開く奏に黙る歌音。

奏「わからないけど、多分ピアノが嫌いなん

だと思う」

歌音「あんなに上手なのに？」

奏「上手とか関係ない。上には上がいる」

口調が強くなる奏。

奏「あ、ごめん」

歌音「上手くなりたくて続けられてるならす

ごいことだよ」

奏、歌音の真面目な言葉に視線を向ける。

歌音「河原木さんもね、細かいことが大嫌い

だったんだって」

奏「オルゴールって細かいことの塊じゃん」

歌音「だから最初はぜったいにやるもんか！

って思ってたんだって」

小さく笑う歌音。

歌音「でもある日、うちに来てオルゴールの曲を聴いた時、愛おしくなっちゃったって言ってた」

奏「愛おしい？」

歌音「この音を、世界中の誰よりも一番近くで聴いていたいって」

近づいてくる函館市電。

歌音「私はそういうのよくわからないけどね。でも絵の教室を始めて隣のクラスの油画の臭いとか嫌いになるけど、それでも絵を描いていたいって思うな——」

駅に到着する函館市電。

歌音「あ、電車来たよ！ ……奏ちゃん？」

立ち上がるうとしない奏。

奏を見る歌音。

○ 富谷家・奏の部屋（夜）

寝っ転がって天井を見る奏。

目を瞑る奏。

奏、起き上がったって楽譜を捲ったり、スマホ片手に曲や作曲家など調べ出す。

○オルゴール専門店（昼）

午後から呼ばれた奏、レジに向かう。

律歌「あ、富谷さん」

奏「本日もよろしくお願いします」

律歌「ええ、よろしく」

奏、レジの奥に行き、エプロンを着て魅せに立つ。

香織、観光客と話をする。

歌音、受付場所で体験しに来た観光客を案内している。

奏、歩きながら店内の様子を見る。

○オルゴール作り体験コーナー（昼）

歌音、他の観光客を案内中。

受付場所で待つ女性二人組。

奏「体験会、ご希望ですか？」

気が付いて近づく奏。

女性1 「あ、はい！」

女性2 「今大丈夫ですか？」

奏「問題ございません。こちらにご記入の上、準備いたしますので少々、お待ちください」

奏、体験する場所の机の上を綺麗にする。

受付場所に戻る奏。

奏「お待たせいたしました。どうぞ、こちらへ」

記入された紙を確認しながら案内する奏。

制作場に案内する奏を見る歌音。

歌音、説明し終えた奏に近づく。

歌音「ごめん、奏ちゃん！　ありがとうー！」

奏「大丈夫」

奏、体験コーナーと店内を交互に見る。

奏「人、大分増えたね」

歌音「お盆休み前とか、混む前に行っておこうって思う人がいるみたい。前にお母さんが言ってた！」

歌音、女性二人組に呼ばれ、戻る。  
奏、店内の在庫出し作業に行く。

○オルゴール専門店（昼）

オルゴールを丁寧に並べていく奏。

女性客に話しかけられる律歌。

近くで陳列していると会話が耳に入る  
奏。

女性3 「この曲の題名を知りたくって……」

スマホをもらい、耳元で流す律歌。

律歌、聞き終え、スマホを耳元から離す。

女性3 「曲名もわからないのに聞いて申し訳  
ないんですけど……その、この曲のオルゴ

ールを探して……む、難しいですよね！」

律歌「少々お待ちください。スマホ、お借り  
してもよろしいでしょうか？」

女性3 「は、はい……！」

スマホを持って香織に聞きに行く律歌。

様子を見つめる奏。

香織、首を傾げる。

女性3の元へ戻る律歌。

律歌「大変申し訳ございませんが……」

頭を下げる律歌。

律歌と女性3に近づく奏。

奏「その曲、聞いてもよろしいでしょうか」

女性3「え、あ、はい、もちろん……！」

律歌からスマホを渡され、曲を聴く奏。

聞き終え、女性3にスマホを返す奏。

奏「わかります」

女性3「え、わかるの？」

奏「お持ちいたします」

奏、奥からオルゴールを持ってくる。

奏「『美しく青きドナウ』です」

女性3「ど、ドナウ？」

奏「川の名前です。ドナウ川というドイツに

ある川です」

女性3「へ、へえ……！ 川の名前……！」

奏「三大ワルツですから聴いたことはあるか

と思いますが、なかなか題名は聞きません

よね」

女性3 「初めて知りました！ 『美しく』 ……

…」

奏 「『青きドナウ』です」

女性3、何度も頭を下げ、満足そうにオルゴールを持ってレジに向かう。

律歌 「そういえばピアノ上手なんだっけ」

奏 「…まさかこのようなところで役に立つとは思いませんでした」

律歌を見る奏。

奏、小さく微笑む。

観光客に話しかけられ真顔に戻る奏。

律歌、奏を見届けてから持ち場に戻る。

○オルゴール作り体験コーナー（夕）

体験会を終えた女性二人組を見つける奏。

女性2 「やっぱりこっち？」

女性1 「いやこっちの方がよくない？」

曲一覧の前に立つ女性1、女性2。

奏 「曲、変えるんですか」

女性1 「あ、はい！」

女性2 「いい曲ばっかで迷いますね！」

奏 「ありがとうございます」

頭を下げる奏。

奏 「もしよろしければ私のおすすめをご紹介します

させていただけますもよろしいでしょうか」

女性2 「え、めっちゃ聞きたいです！」

ある曲に手を当て紹介する奏。

受付場所まで観光客を案内し終えた歌

音、奏を見る。

○オルゴール専門店（夕）

出入り口で頭を下げ、お見送りする奏、

歌音、律歌。

歌音 「ねえねえ！ 何の曲おすすめした

の！？」

目を輝かせ、奏に近づく歌音。

奏 「と、『トロイメライ』」

歌音 「とろろ？」

律歌 「『トロイメライ』。シューマンの曲」

歌音 「お姉ちゃん、知ってるの!？」

律歌 「オルゴールにある曲の名前くらい憶えておきなさいよ……」

律歌、近くにあるオルゴールから『トロイメライ』の曲が入ったものを探し、ネジを回す。

歌音 「素敵な曲!」

奏 「キーホルダー」

歌音 「キーホルダー?」

奏、遠くにいる女性二人組を見る。

奏 「一つ、足りなかったから」

女性二人組の鞆についているキーホルダー、揺れる。

河原木 「誰かいないと思ったのか」

後ろから声をかける河原木。

歌音 「うわっ! びっくりした!」

河原木 「ごめん、ごめん」

律歌、女性二人組の方を見る。

律歌 「……なるほど」

歌音 「どういうこと!？」

(回想)

○オルゴール専門店(夕)

レジで対応する律歌。

隣で待機する奏。

女性2 「ありがとうございます！」

奏に向かってお礼を言う女性2。

奏 「い、いえ」

女性2 「聞いたお話とピッタリ合ってた」

律歌 「お話、ですか？」

オルゴールを包装紙で包みながら話す

律歌。

女性1 「はい！ この曲、ピアノの魔術師つ

て呼ばれてた人が絶賛してたんですよ

ね！」

奏 「あくまで、聞いた話ですが」

女性2 「『人生最大の喜びを味わえた』曲なん

て、ピッタリすぎてびっくりしました。す

ごいですね、店員さん！」

女性1と女性2、奏を見て微笑む。

奏「……お役に立てたなら何よりです」

優しく微笑む奏。

（回想終了）

○オルゴール専門店（夕）

律歌「てか河原木さん、こんなところにいて

いいわけ？」

河原木「ちよつと休憩」

律歌「さつきもそう言って近くのカフェ行っ

てたよね」

河原木「な、なんでそれを！？」

ため息を吐く律歌。

律歌「あとでおじいちゃんに報告しておくか

ら」

河原木「嘘、嘘、もう戻るから！」

律歌と河原木、店の奥へと行く。

歌音、後を追う。

奏、戻ろうとした途端、開けっ放しのオルゴールを見つけ、持ち上げる。

後ろを覗く奏、ラベルにはコンクールで

弾いた曲名。

奏、ゆっくりとネジを回す。

歌音「奏ちやーん！」

手を振る歌音。

奏、歌音を見てからオルゴールを置き、  
仕事に戻る。

○堀川町駅（朝）

奏、イヤホンでピアノの音を聞きながら

函館市電を待つ。

函館市電、駅に到着する。

○函館市電（朝）

座って本を読む奏。

奏、乗ってくる人をチラチラ見る。

八幡坂の前を通る函館市電。

奏、窓の外を見る。

○末広町駅（朝）

降りる奏。

函館市電を見送る奏。

○教室（朝）

課題をまとめる担任の先生。

夏休み期間の話をする生徒たち。

奏、椅子に座ってスマホで他の人が弾いているピアノの動画を見る。

○八幡坂前学校・帰路（昼）

夏休み明け、始業式を終えた生徒たち、寄り道をしたり、帰ったりする。

○八幡坂（昼）

同級生と話している最中、奏を見つける

歌音。

駆け下りる歌音。

歌音「奏ちゃん！」

奏の先で足を止める歌音。

奏、歌音の顔を見る。

歌音「夏休み、本当にありがとうね！」

奏「前も聞いたって、それ」

歌音「お礼は何度も言いたいから！」

笑う歌音。

呆れながらもどこか微笑ましいと歌音  
を見る奏。

一緒に歩く奏、歌音。

奏、パンフレットを歌音に渡す。

奏「今度、ピアノのコンクールに出るんだけ

どよかったら聞きに来ない？」

パンフレットを受け取る歌音。

パンフレットに昔弾いた曲名、載ってい  
る。

歌音「いいの！？ 行く！ 行きたい！ お

姉ちゃんも予定空いてたら誘っていい？

あと河原木さんも！」

奏「い、いいけど……」

歌音「じゃあ早速確認しに行こう！」

奏「は！？ 今から！？」

歌音「思い立ったが吉日！ ……だよね？」

歌音、奏の腕を引っ張りながら坂を全速

力で下っていく。

奏、遠くの港を見て、目を見開く。

走りながら奏を見る歌音。

歌音「そういえば！ 私がなんで音が好きかわかったよ！ 河原木さんにも同じ話したらね！」

後ろ向きに奏の方へ身体を向けて、下っていく歌音。

歌音「『歌音さんは振動弁に当たる音とか鍵盤を叩く音が好きなんだよ』だって！」

奏「何それ」

奏、小さく笑う。

歌音、つられて一緒に笑顔になる。

○ 富谷家・奏の部屋（昼）

譜面台の隣に置かれたオルゴール、窓から入る太陽に当たって光る。